

特定非営利活動法人 子どもの虐待防止ネットワーク・あいち

News Letter

Vol. 14

2000.4.23

キャプナ ニュースレター

発行: 子どもの虐待防止ネットワーク・あいち 〒460-0002 名古屋市中区丸の内1-4-4-404 TEL 052(232)2880 FAX 052(232)2882



NPO法人CAPNAが誕生しました

会員宅を間借りして、電話相談を開始して以来5年。CAPNAは、4月3日に特定非営利活動法人(NPO法人)の認証を受け、ようやく法的に一人前の組織になることができました。これも、活動を支えてくださった皆様のおかげです。ありがとうございます。

これからも電話相談をはじめ、社会に役立つ活動を広げ、子どもたち、親たちの支えになっていきます。12月8、9日に名古屋市国際会議場で開かれる第6回子どもの虐待防止研究会全国大会に向けて総力で準備に取り組んでいる最中です。いっそうのご支援をお願いいたします。

時間との闘いを乗り越えて…

事務局次長 水戸憲一

NPO法人格を取得する市民団体は珍しくなくなりましたが、取得までの作業はそう簡単なものではありませんでした。事務局次長・水戸憲一が、NPO法人設立までの道のりについて報告します。

「CAPNAさんほど大きな団体なら、社会福祉法人になさったほうが、事業経営が安定するのではないですか？」

昨年の10月末日、NPO法人の認証窓口となっている愛知県消費生活課を訪れた際の担当者の第一声である。たしかに、CAPNAと同じような活動を行っている東京の「子どもの虐待防止センター」は、社会福祉法人であり、行政からの補助金によって経営も安定している。しかし、逆に言えば社会福祉法人格を持ったことで、活動内容が制限されてしまったという話も聞く。

「私たちは、あくまでも市民団体のスタンスを崩したくはありません。CAPNAは、虐待防止活動を市民ひとりひとりに課せられた責任であると思っています。たしかに、経営面の安定も大切ですが、それよりも、自由な雰囲気とフットワークの軽さを大切にしたいのです」

こうして、私たちは、NPO法人設立までの道のりを歩むこととなった。

常務理事に就任した矢満田篤二、兼田智彦、そして専務理事となった私が毎晩のようにFAXでやりとりをしながら、就任承諾書、事業計画、決算報告書、財産目録などの書類を作成し、運営委員会でそれらの書類を再検討し、県庁に持参するという作業が続いた。4回ほど書類訂正のために県庁まで足を運んだが、誤字脱字はもちろん、定款に矛盾があれば、消費生活課のチェックが入り、その場で返却される。

法人格取得は時間との闘いだった。なぜなら、CAPNAは今年の12月に「第6回子どもの虐待防止研究会全国大会」を控えている。この大会準備のためにも、今年の4月までに、NPO法人格がどうしても必要だった。現段階において、日本

ではNPO法人に対する企業からの寄付の税制優遇措置はない。だが、信頼できる市民団体の証として、経営を安定させるための補助金収入は、将来的には、行政や財団ではなく、民間企業から得たい。幸い、昨年末からノリタケカンパニー顧問の菊島雅雄さん、東海銀行東友会の岡千弘さん、元ドイツ銀行支配人の伊藤義明さんなど、財務に強い助っ人がCAPNAに参加され、私たちがもともと不得意とする経理面に関してアドバイスしてくださるようになったおかげで、会計情報も以前よりスムーズに公開できるようになった。こういった多種多様な人と人とのつながりも、NPOの特徴ではないだろうか。

「ここまで立派な定款と、きちんとした書類が整っているNPOは、他に見たことがありません。CAPNAさんが早く法人登記できるように我々も努力します」

2月末に、タイムリミットもギリギリのところで消費生活課の担当者からいただいた言葉は、嬉しいものだった。念願の認証が降りたのは3月21日。この日から2週間以内に、今度は名古屋法務局へ登記を行わなければならない。お役所仕事はいろいろとややこしいため、一般の会社設立なら、ここで司法書士に業務をバトンタッチするところだが、私たちには、自分たちの手で登記まで行いたいという市民団体としてのプライドがあった。ここでも書類審査のために何度も事務所と法務局の登記相談窓口までの距離を往復し、2000年4月3日、やっと登記申請も終了。ついに、任意団体CAPNAは「NPO法人CAPNA」へと生まれ変わった。

今年の総会は、この喜びを皆さんと分かち合いたいと思う。

あなたに とどけ

「この部屋のことは、この部屋においてゆく」—これは、電話相談員になった当初から、先輩たちに言われ続けてきた鉄則だ。

相談の電話でもたらされた情報や感情は、相談室から持ち出さないということ。一つには守秘義務、一つには相談員の気持ちのバランスに配慮するという意味だろう。そして、それはさほど難しいことではないと私は高を括っていた。油断していた。

でも、その日は、ちよつと違っていた。電話当番の帰り道、地下鉄の終点で降りる筈なのに2つ手前の駅で、前の人につられるように降りてしまった。もう暗くなりかけている時刻なのに、なんということなのだろう。

「きょうは、すっかり彼女にやられてちゃったなア」

—この部屋のことは— 浅井 菜穂子

ホームで、次の電車を待ちながら、頭の芯も肩も背中も、ガチガチに凝っているのに気づいた。途方もない疲労感。

この日の電話の彼女は、圧倒的に自分のドラマを語り続ける人だった。両親から虐待され続けたつらい前半生。時には淡々として、時には泣きじゃくって、沈黙して……。一本の電話を通して、この部屋の中は劇場となり、私はたった一人の観客だった。彼女のつむぐ物語は多分、虚実入り混じっているかもしれない。あるいは、彼女自身は精神を病んでいるのかもしれない。であるにしても、私は彼女の物語に耳を傾け続けるしかない。いや本当は聞きたかったのだと思う。すごく。ドラマの幕引きは彼女がしてくれた。「だから、両親を告訴したい」という強烈なエンディング。

すでに二時間近く経過していた。受話器を置いて後片付けをして部屋を出た。その時、置いていく筈のものを連れて帰ってしまったのだ。その後、しばらく彼女の特徴のある声が私の中にとどまっていた。その間、私は相談室に足を向ける気力失っていたし、なんだか海の底に沈んだような気分で過ごしていた。

他人の感情が地震の後の津波のように、予期せぬ方向から襲いかかってきたようにも思えた。

「この部屋の中のことは、この部屋に置いてゆく」—そのことの難しさを、この日彼女が教えてくれた。油断をしてはいけない。



本づくりに集う 若い力 お助けボランティア奮闘

今、CAPNAの事務局には、都道府県別に整理された事件カードが棚に整然と並んでいます。一昨年秋に出版し、大きな話題を呼んだ「見えなかった死—子ども虐待データブック」の続編をつくる作業が急ピッチで進んでいるのです。今回掘り起こした事件は、1995年から99年までの5年分、約400件。一つ一つコード表をつけてカードに分類していきました。その作業に力を貸してくれたのが、名古屋市名城ローターアクトクラブの皆さんを中心とするボランティアの方たち。その奮戦ぶりを紹介します。(安藤 明夫)



データカードづくりに動くボランティアの皆さん
= 3月CAPNA事務局で

名城ローターアクトクラブは、30歳までの若い人たちでつくる社会奉仕団体です。昨年来、CAPNAの活動にさまざまな形でご協力していただいています。今回、カードづくりの労力奉仕をお願いしたところ、快諾いただき、10人近くの方たちでローテーションを組み、3月の1ヵ月間、毎週月曜日と金曜日の夜にお手伝いしていただきました。

プリントアウトした事件記事を1枚ずつのカードに張っていく作業、それを都道府県別に分けた後、事件の第一報、続報、公判記事というふうに分類し、さらに事件の種別、被害者・加害者の性別、年齢、動機などをコード化していく作業と続きました。

いずれも地味で骨の折れる仕事です。でも、作業部屋となったCAPNA事務局の六畳間は、いつも和気あいあいとした雰囲気でした。ボランティアの主体は独身女性たち。幼い子どもたちがせっかんを受けたり、ネグレクトによって亡くなっていく事件の記事を読みながら「うそー！ひどい。信じられない」「自分の子じゃないの！、何で殺すんのだよ」と憤りの声も飛び交っていました。CAPNAの女性ボランティアたちとも仲良くなり、お菓子をつまみながらの雑談にもぎやかでした。

男性陣では、会長の遠藤さん、専門学校生の今泉さんが毎回のように参加してくれました。

本作りをお手伝いしていただいた自体、本当にありがたかったけれど、それ以上に、これから家庭を持っていく若い方たちが子どもの虐待の問題について知識を深め、真剣に考えてくださる様子が、うれしかったです。こうした交流も、虐待防止活動の一環なのだと感じました。

3月下旬に開かれたローターアクト内の飲み会では、20人ほどのメンバーが虐待問題について激論を戦わせたそうです。

こうして、カードづくりの作業がほぼ完了し、これからは入力したデータのチェックを経て、いよいよ本の執筆にとりかかります。

この本作りの作業は、安田生命社会事業団の助成を得ており、6月までにまずレポートをまとめる作業が迫っています。その後、より多角的な検証を加え、本をまとめていく予定です。出版時期は現在のところ9月を予定しています。

入力した事件数は、前回の「見えなかった死」に比べ、倍増しました。新たに掘り下げたい視点もいくつかあります。20世紀末の日本の虐待死研究の総まとめと言える本にしたいと考えております。ご期待ください。

ボランティアの声



ナマの事件に触れて勉強

遠藤賢彦さん(30) 名城ローターアクトクラブ会長

今まで、老人ホームを訪問したり、栄で清掃活動をしたりといったボランティア活動をしたことはありますが、こういうお手伝いは初めての体験でした。子どもの虐待死事件のデータ起こしをする中で、とにかく事例をたくさん知ることができて勉強になりました。

例えば、「ネグレクト」について、初めはどういうことを言うのかあまり分かりませんでした。でも、データ起こしをしていく中で、一口にネグレクトといっても、程度の違い、幅があることが分かりました。

お手伝いをするようになってから、子どもの虐待についての記事が目にとまるようになりました。メンバーと交わす話の内容も濃くなってきました。「これって心中？」とか「いやいや、発作的殺人じゃない」とか。

うちの子は1歳5ヵ月。本当にかわいいですが、言うことを聞かないときもありますよね。一つ一つの事件を見ながら「ああ、ここまできたか」と思ったり、親としてどこか分かる部分があったり、いろいろ考えさせられました。



分類コード覚えるのが大変

今泉英之さん(19) 専門学校生

CAPNAのことはテレビで見えて知っていました。子どもの虐待を防ぐために頑張っている人たちだな、って。実際に来てみて、地域のいろんな人たちと組んで活動をしていることに驚きました。ここはちゃんと地道な活動をしているんだな、と思いました。

ぼくは人見知りするタイプですが、快く迎え入れてくれてうれしかったです。初めて来たときは、虐待のことをいろいろ聞かれて答えられなくて勉強不足を痛感しましたが、ちょうどこのデータブックづくりがあったので、お手伝いできて良かったです。家が遠いので(蒲郡)、あんまり遅くまではできませんでしたが。

作業は、最初、分類のコードを覚えるのが大変でした。けれど、地道にやるのは結構好きなんです。途中から、新しく来た人たちの指導係になったのですが、名城ローターアクトクラブの方たち、みんなぼくより年上だし、恐縮しちゃいました。

でも、ぼくたちの専門学校でも、ほとんどの人がCAPNAのことを知りません。すぐ近所の学校なのに…。もっともっと有名になってほしいです。



こんなにたくさんあるなんて…

小澤優子さん(26) 名城ローターアクトクラブ

CAPNAの事務局で、虐待死事件のカードを見て「たくさんあるなあ」ってびっくりしました。

新聞などで、虐待事件の記事を見ることはよくあったけれど、想像以上にいろいろな事件があって、信じられないような残酷なケースもけっこうありました。

やっぱり、隣の人が何やっているか分からない社会というか、人と人のつながりが乏しい社会の中で、こうした問題が増えているのかなって、考えさせられました。

この作業をお手伝いする中で、私自身も虐待問題に関心を持つようになったし、家族でも虐待について話をするようになりました。

「自らの虐待」が56%

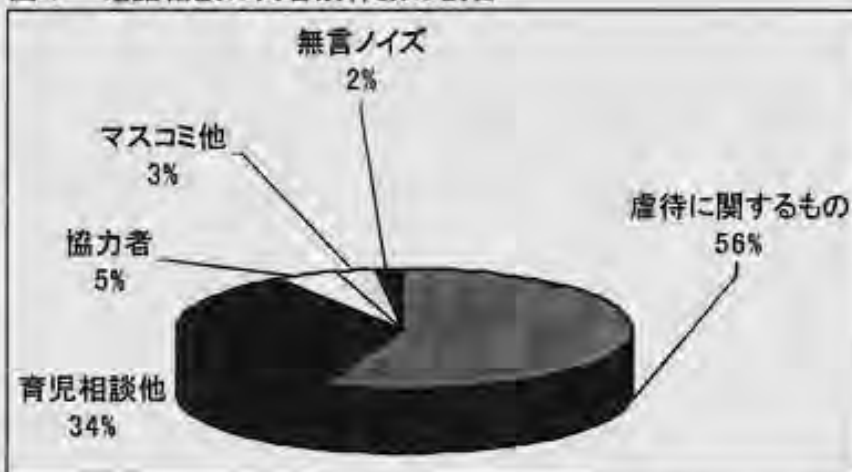
電話相談4年の集計

CAPNA ホットラインがスタートしてから4年7ヵ月が経ちました。最近では、名古屋・東海あわせて月々約100件の相談を受けるまでになっています。発足から昨年9月までにCAPNA ホットラインで受けた電話相談数、内容、傾向などについて、電話相談研修委員の隈元真理子が報告します。

ここで紹介するデータは95年9月初めから99年9月末までの4年1ヵ月で受けた相談計2,893件の内容を概観したものだ。

電話相談の内容別に分類すると、「虐待にかかわると思われるもの」が56%（1,613件）、「育児相談ほか」が34%（984件）である。（図1）「育児相談ほか」には、虐待がはっきり語られないものや、いじめ、夫から妻への暴力、老人虐待なども含まれる。

図1 電話相談の内容別件数の割合



育児相談の電話が「子どもの虐待防止」を目的とするCAPNAのホットラインにかけられていることには注意してよいが、ここでは子ども虐待に関するもののみをとりあげる。

まず虐待がからむ相談1,613件の相談者について見ると、その大多数94.4%が女性からである。30代、20代、40代の子育て中の母親からが多い。（表1）

主訴別にみると、わが子を虐待してしまう・していたという「自らの虐待」についてが56%、自分が虐待されている・されてきたという「被虐待」についてが27%、「目撃・通報」が18%である。虐待者からの訴えが最も多く、ついで被虐待者である。いずれも打ち明けにくい話であることから、匿名性のある電話相談が利用されていることがわかる。

虐待のタイプは身体的なもの54%、心理的なもの35%、性的なもの6%、ネグレクト3%である。これらは重複していることもあるが、一番重篤と思われるものに分類されている。（表2）

つぎに重症度、緊急度だが、これらは大阪の児童虐待防止協会の基準を参考に、次のように分類している。

生命の危険：子どもの生命の危険が「ありうる」「危惧する」もの

重度：子どもの健康や成長や発達に重要な影響が生じる可能性があるもの

中度：長期にみると子どもの人格形成に重い問題を残すことが危惧されるもの

軽度：親や周囲の者が虐待と感じているが、一定の制御があり病理がみられないもの

危惧：虐待行為はないが危惧する訴えがあるもの

これで見ると中度、軽度が多いのだが（計73%）生命の危険20件、重度237件も見逃せない数である。（表3）この判別基準はあくまで子どもを中心にしており、過去または過去から現在にいたる虐待経験を主訴とする被虐待者（主に成人）のものも、これに準じて分類している。そのため緊急度との関連でいうと、生命の危険はもちろん緊急だが、重症度は必ずしも緊急・早急に結びつきはしない。

緊急に対応する必要があると判断された場合、CAPNAでは、弁護団を通じて所管の児童相談所などに通報する。ホットラインや、弁護団が直接、情報提供を受けたものを合わせると、これまでにCAPNAで対応した緊急事例は、100件をこえている。

子どもを虐待してしまうという相談の内容は千差万別だが、よく聞かれる言葉がある。つい「いらいらして」「かっとして」である。ほとんどのお母さんが、手を出してしまってから、なじってしまったから罪悪感にさいなまれている。育児・教育に対して母親が重い負担を感じていることがうかがわれる。また、多くの人が、適切な援助が得られず、孤独な立場におかれて悩みを深めている。通り一遍でない子育て支援が望まれる。

CAPNAとしては、電話できる年齢の子ども自身からも利用してもらえる工夫をするなど、電話相談をより信頼される充実したものにしていくことがこれからの課題だ。

表1 相談者の性別・年代

	女性	男性	合計
10代	24	17	41
	1.5%	1.1%	2.5%
20代	258	10	268
	16.0%	0.6%	16.6%
30代	354	10	364
	21.9%	0.6%	22.6%
40代	187	9	196
	11.6%	0.6%	12.2%
50代	20	8	28
	1.2%	0.5%	1.7%
60代	7	0	7
	0.4%	0.0%	0.4%
70以上	1	1	2
	0.1%	0.1%	0.1%
不明	672	35	707
	41.7%	2.2%	43.8%
合計	1523	90	1613
	94.4%	5.6%	100.0%

表2 虐待のタイプ別受信数

	身体的	心理的	ネグレスト	性的	不明	計
件数	866	565	50	101	31	1,613
割合	54%	35%	3%	6%	2%	100%

表3 重症度別受信件数

	生命の危険	重度	中度	軽度	危惧	不明	合計
件数	20	237	603	585	23	145	1,613
割合	1%	15%	37%	36%	1%	9%	100%

会費改定のお願い

CAPNAでは、本年度より、会費を以下のように改定させていただきます。私たちは、特定非営利活動法人の認証を得て、社会的責任のある法人として継続的に社会に役立つ活動をしていく責務を持つことになりました。そのためには、まず財政基盤を安定させることが不可欠です。どうぞご理解をいただきますよう、お願い申し上げます。

年会費 会員 12000円（賛助会員の方は5000円）

振込先 口座 00880-2-102543

名義 子どもの虐待防止ネットワーク・あいち

ご寄付も、この口座で受けつけています。

なお、会費改訂と合わせて、現在約500人の会員を倍の1000人にしようという目標を掲げ、PR活動を展開しています。皆様もお知り合いにCAPNAのことを紹介していただければ幸いです。

1000人体制を確保できたなら、有給スタッフ（現在1人）の増員、電話回線（現在2回線）の拡充、地域のネットワークの強化などを通じて、より多くの子どもたちの力になっていきたいと思えます。私たちの活動をご理解のうえ、どうぞご支援をよろしくお願い致します。

市民講座、 次回は6月22日です

次回のCAPNA市民講座は、6月22日（木）午後6時30分から名古屋市中区大井町、名古屋市女性会館で行います。講師は豊田市の厚生連加茂病院小児科医師、高橋昌久さん（CAPNA理事）。演題は、「腹痛外来へ来る子どもたち—胃炎、潰瘍、不登校、そして・・・」です。病気をかかえる子たち、そしてその親たちがかかえる問題と総合的な援助のあり方について話します。

CAPNAニューズレター14号

編集人 祖父江 文宏
1部 200円

発行 特定非営利活動法人
子どもの虐待防止ネットワーク・あいち
〒460-0002 名古屋市中区丸の内1-4-4-404
TEL 052(232)2880 FAX 052(232)2882



子どもを「かわいい」と思えない
カッとしてつい手を上げてしまう
虐待されている子が、近所にいる
虐待を受けた記憶に苦しんでいる
ほくは（私は）虐待を受けている
育児に疲れた。私はダメな母親だ

CAPNAホットラインをご利用ください

052-232-0624

平日 AM10～PM4 研修を積んだスタッフが対応。
木曜日は東海市（0562-36-0624）でも受け付けます。